

**原著論文**

## トレーニングの人類学序説

—戦術的ピリオダイゼーションの疲労概念を事例とする概念の「翻訳」—

相原 健志\*

### **A Prolegomenon to Anthropology of Training: “Translation” of concepts with the concept tiredness in the Tactical Periodization as a case studied.**

Yasushi Aihara

#### **Abstract**

The objective of the present article is to pioneer a field of “anthropology of training,” in tackling a methodological problem relevant to it: how conceptions which have been found in the sport field and determine firmly the sport practice (training) should be treated and converted into anthropological knowledge or concepts. It can be supposed that training of modern sports is characterized by being determined by a training methodology that comprises a system of concepts. When opening a path to anthropology of training, solving the problem referred above, this article focuses on “translation”, a method proposed by a Brazilian anthropologist, E. Viveiros de Castro, taking as a concrete case the concept “tiredness” in a football training methodology originating in Portugal, the “Tactical Periodization (PT).”

Viveiros de Castro argues the essence of anthropology resides in “translating” concepts found in the field into academic ones. Though “translation” does not seem to express adequately, or does even seem to betray, what the original conception to be “translated” has meant, he insists, it is “translation” that brings to us a novel and innovative concept. Through “translation”, a new concept can be produced, or a new reality can be opened or actualized which was hidden within those concepts anthropologists have had. Also, “translation” can be a method complementary in anthropology of sports, where not many methodological discussions have been made, in terms of what effects this discipline can make. Furthermore, considering K. Blanchard and A. Cheska suggested that studies of anthropology of sports would influence on us, including not only anthropologists of sports but researchers of other disciplines related to sports and actual practioners like coaches or schoolteachers, anthropology of training via the method of “translation” can offer another way of relativization than what anthropology of sports have

---

\* 慶應義塾大学など非常勤講師

made. More concretely saying, anthropology of training can provide us with possibilities that they transform our existing ways of training while influenced by those concepts “translated”.

Our case to be studied is the concept “tiredness” within the training methodology “PT,” invented by an ex-professor at University of Porto and also professional football coach, Vítor Frade. While revising the literature of this methodology, I made fieldwork in an U-17 team of a club “F” at Porto, which applied this training methodology.

Their training was determined according to how tired their players are out of the plays in the game (normally) held on Sunday. As for youth teams in almost every club at Porto, as far as I researched, training was usually held three days a week. “F” was not any exception to it, with the U-17 team scheduled to train on Tuesday, Thursday, and Friday. Tuesday was the first training day after the official game was held on Sunday as well as being the most distant day from the next game (also Sunday), with the next day (Wednesday) off for recovery. Therefore, the coaches set relatively low intense but not too low intense exercises. Similarly, on Thursday, when three days have passed from the previous game and the players have recovered from tiredness well enough to play a full-court game, each of the exercises was conducted with the longest duration of the training days. Again similarly, in Friday training, when just two days were left for the next game, the exercises were cut up into small sessions of short duration, which would help prevent the players from feeling tired when the game at Sunday started. Thus the constitutive principle of training in PT is “tiredness” of the players, but it should be emphasized that this “tiredness” is not exclusively about the physical aspect; rather it is about both the physical and mental aspects, since tiredness is often modified by another concept in PT, “tactic” (and so, with its adjective form, “tactical tiredness”). As some study already implied, PT has as one of its conceptual backgrounds Spinozist philosophy, where the Parallelism between mind and body was stated. Also, from the evidence of the fieldwork, this tiredness is thought of as being correlated to the tactical intensity that the environment where the training is conducted has within it (which here we call “the intensity of environment”).

“Tiredness” in PT is a state of players in which they are to some extent incapable of playing, or is a relative incapacity or decline of the capacity. Then “tiredness” is transformed into a new concept, which signifies a decline in mind-body parallelistic capacity correlated with the intensity of the environments where the training activity is conducted. In other words, “tiredness” is “translated” into a new one which was potentially hidden and so far could not be conceptualized.

The new concept explicates a different reality from within that concept itself, thus exposing us to another version of reality, to a reality that has already existed and was yet to be known. Conversely saying, this new reality, which was multiplied within the concept, is explicated from within it through the “translation”. This “translation”, in turn, opens possibilities that we, as researchers, practioners or trainers of some sport, would create other real practices of sport training on our own fields of sports. Therefore, anthropology of training, through “translating” conceptions found in the field into our anthropological concepts, is potentiated to supply a base on which our own world of sports would multiply and would change into another reality.

**Keywords: translation of concepts, anthropology of training, Tactical Periodization**

キーワード：概念の翻訳，トレーニングの人類学，戦術的ピリオダイゼーション

## 1. はじめに：目的と問題の背景

### 1-1 目的

近代スポーツをプレーすることそれ自体、とりわけトレーニングをいかに理解すればよいか。トレーニングを人類学的観点から考察するとき、それを「トレーニングの人類学」と呼ぶならば、それはいかなる知見を与え、いかなる可能性を開くのか—本稿は、このような問題意識のもと、トレーニングの人類学という領域を新たに開くために、そこに潜む一つの方法論的問題に取り組みながら、その可能性を検討する。より具体的には、スポーツのトレーニング実践を研究対象とする場合、その実践を律するトレーニング理論やその理論内に含まれる諸概念<sup>1</sup>をいかに扱うべきかという問いを立てる。そしてブラジルの人類学・民族学者E. ヴィヴェイロス・デ・カストロの提案する「翻訳 (traduction)」を方法とし、「戦術的ピリオダイゼーション (Periodização Tática, 以下PTと略記)」と呼ばれるサッカーのトレーニング理論における「疲労」概念を具体的な対象にし、以上の問いに解答を試みる。

### 1-2 隠れていた問題：概念・理論の在り処

スポーツのトレーニング実践を特定の動作やプレーの学習過程と捉えるなら、人類学全体に視野を広げると、実践者がいかにその周囲のモノや他の実践者と相互作用を行いながら学習を行うか—つまり実践と学習の社会性—が広く論じられてきた<sup>2</sup>。しかしこの実践・学習論はある対象上の限定があった。例えば田辺は以下のように述べる。「マッサージ師の技法の説明は、ある種の理論によって自らの実践を説明していると言える。人類学者もしばしばその語りをそのままマッサージについての民族誌として記述するかもしれない。し

かし、マッサージの実践の全体像はこうした分解された小単位の動作やそれらの効果だけで説明することは不可能である」[田辺 2003: 92]。そこで田辺は、彼らが持つ、マッサージの実践を律する理論を議論の直接の対象とせず、むしろその理論では説明しえない実践を考察する。理論は、それにより説明できない実践とは異なるところに置かれ、結果、あたかも実践の理解のために理論を考察する意義が相対的に小さいかのように見えてしまう。

しかし、スポーツの実践を研究対象としたとき、こうした対象の限定は果たして可能なのだろうか。確かに、理論から逸脱する実践がフィールドにおいて展開されるのは事実だろう。とはいえスポーツの実践—とりわけ近代スポーツ<sup>3</sup>—は、しばしば強固な概念体系であるトレーニング理論に律せられて展開されることもまた事実である。フィールドにて発見される実践の理論を方法的に考察の対象から排除することは、スポーツのトレーニング実践という研究対象の特異的な特徴を切り下げかねないのではないか。しかしスポーツ人類学でも、爾来トレーニング理論はほぼ主題化されてこなかった。例えばR. サンズは、陸上選手などのトレーニングを素材として民族誌的研究を行ったが、彼の視座はトレーニングそれ自体というより、トレーニングを通じて形成される文化的アイデンティティの方に向けられていた[Sands 1995]<sup>4</sup>。人類学においてもスポーツ人類学においても、近代スポーツのトレーニングが強固な理論により律せられて実践されるという特徴的な事実は、ほぼ等閑視されてきたと言ってよい。

では、その事実を人類学者はいかに捉え、そこにいかなる問題を見出せるのだろうか。これを考える上で示唆的な機会があった。それは、2015年3月に鹿児島大学を会場に開かれた日本スポーツ人類学会大会での、「トレーニングの人類学」と題されたシンポジウムでの議論である。シン

ポジウム内で、武道の実践者—この場合は熟練した剣道家—に対して、「稽古」と「トレーニング」がいかに異なるかという問いが繰り返された。もしここで「稽古」を、フィールドの人々が有している概念と捉え、「トレーニング」を調査者側が前者の概念の対照項として措定したものとすれば、問いが繰り返される中で図られていたのは、「稽古」という概念の領域画定だったと解しうるだろう<sup>5</sup>。スポーツ実践者の有する、様々な概念から構成される理論を、いかに学問的な論点や言葉へと変換できるのか、という方法論的問題が浮かび上がっていたのではないかと。確かに、シンポジウムで議論された具体的な論点—「稽古」と「トレーニング」が概念的にいかに異なるか—は、重要な問題である。しかし着目すべきは、その具体的な概念の組み合わせに潜んでいた、より一般的な問い—フィールドの人々の概念と調査者側の概念が異なる時、前者をいかに学問的知へと変換するのか、という問いである。

とはいえ、フィールドにおいて発見される実践の理論という着眼点は人類学の歴史の中で隠れた主題である。ヴィヴェイロス・デ・カストロは近年、1980年代後半から行ってきたそのアマゾニア先住民研究をもとに、「概念の人類学」と彼自身が呼ぶ視座を洗練しつつある[Viveiros de Castro 2009, 2015]。彼が主張するには、人類学という知的営為は、明示的であれ潜在的であれ、調査対象である他者の思考や実践を人類学という学問の「概念」として「翻訳」することである。ここには、スポーツ実践のトレーニング理論、またそこに含まれる様々な概念をいかに扱うべきか、という方法論的問題に対する手がかりがあると考えられる。

では、概念を「翻訳」とはいかなる方法なのか、そして、フィールドにおいて発見される、強固に概念が体系立てられているスポーツのトレーニング実践の理論を「翻訳」という視座が

スポーツ人類学において可能だとして、それは何をなしうるのか、いかなる知見を与える可能性を秘めているのか。本稿はこれより、これらの問題に向かって、ヴィヴェイロス・デ・カストロの議論を検討する。また、「翻訳」される理論の事例として、ポルトガル生まれのサッカーのトレーニング理論、戦術的ピリオダイゼーションの「疲労」概念を挙げて取り組む<sup>6</sup>。

### 1-3 本稿の構成

そこで本稿は、以下のように成り立っている。次節では、ヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」論を検討し、トレーニング理論の諸概念を学問的言葉に変換するための方法を整理し、その方法の有効性をスポーツ人類学のこれまでの蓄積を背景にして検討する。第3節以降にて、事例としてPT、およびその疲労概念を取り上げ、フィールド調査の具体的な状況を示しながら、以上の方法の下で考察する。第3節では、PTの背景的情報、調査方法、調査地の概要を提示する。第4節では、PTの疲労概念に関し、PTの理論的概要と具体的なトレーニングの事例とともに考察し、第5節で、事例を踏まえてPTの疲労概念を「翻訳」する。第6節では、概念の「翻訳」という方法によりトレーニングの人類学が何をなしうるかを論じる。そして第7節で本稿のまとめを行い、今後の展望を考察する。

## 2. ヴィヴェイロス・デ・カストロにおける概念の「翻訳」

### 2-1 「翻訳」の定義と目的

ヴィヴェイロス・デ・カストロは、人類学という知的営為とはフィールドで出会った他者の思考を変容させること、すなわち「翻訳」することだと述べる。

全ての些細でない人類学の理論は、人々の知の実践の「翻訳版 (versions)」であり、そうした類の理論は、これまで歴史的にこの学問のまなざしにおいて「客体という位置」に置かれてきた集団の知的実践と、全く構造的に連続している [Viveiros de Castro 2009: 6]<sup>7</sup>。

フィールドの人々は様々な知的実践を主体的に展開しており、多種多様な概念を有している。一方で、人類学の歴史を彩ってきた様々な概念・理論は、例えばマリノフスキーの「クラ」にしても、当該人類学者がフィールドで発見した様々な概念に起源を持つ。人類学者はそれらの概念や知をフィールドから持ち帰り人類学という学問に適したかたちで変容させた—すなわち「翻訳」したのだ。

では「翻訳」は、いったい人類学者の立場においては何を目的とするのだろうか。ヴィヴェイロス・デ・カストロは以下のように述べる。

異他概念をして「翻訳」者の概念装置を歪ませて転覆させ、原語の意図が人類学者のそれをつうじて表現されるようにし、そうして後者を変容させるようにするものである。翻訳、裏切り、変容 [Viveiros de Castro 2009: 54]。

フィールドで出会う他者の持つ概念を「翻訳」することで、人類学者がその調査時で他者に出会うまでに携えていた知・概念は、ときに「歪み」、「転覆」される。上記の引用は、イタリアの諺、「翻訳者は裏切り者である (Traduttore, traitore)」を下地にしている。これは、翻訳者は、原著者の意図をねじ曲げてしか翻訳が可能でしかなく、よって原著者を裏切っているという意味の諺である。しかし、彼はこの諺の含意を二重に反転させている。一つは、「裏切り」は原著者に対してではなく、その概念を用いていた人類学者に対してな

れる。「翻訳」を行うことで、それまで人類学者が用いていた当の概念の意味内容が、変容してしまう可能性があるからだ。いま一つには、「裏切り」が、原語の意味を不完全にしか表現しないという否定的な含意から、人類学者の概念が新しいものへと変容される可能性があるという肯定的な含意へと反転されている。「翻訳」とは、それまで人類学者が持っていた知・概念を「裏切り」、「変容」させ、新しいものへと更新し、あるいは新しい概念を生産することなのである。このように「翻訳」の目的は、フィールドの人々の異なる知・概念をもって人類学者のそれらを更新させることだと言える。

補助線を一本引いておこう。ヴィヴェイロス・デ・カストロのいう「翻訳」には、例えばイギリスの人類学者 T. インゴルドが論じているような人類学が人類学自身に対して行うような認識の相対化—文化相対主義ないし多文化主義—といかに異なるのかという問題がある。インゴルドは、「翻訳」という語が、相互に異なる文化のあいだに生じる、文化相対主義的な営為だと批判する [Ingold 1993, 2000]。しかし重要なのは、ヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」概念は、むしろ文化相対主義への批判であるという点である。文化相対主義ないし多文化主義においては、相互に区別される語である A と B という概念が、異なる語でありながら、同一の現実を指示する。異なる語（文化）が単一の実体（自然）を指すのだ。他方、同じ語（文化）が異なる現実（自然）を指示するとき、それは多自然主義に関わると述べる [Viveiros de Castro 1998, 2009]。ヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」という方法が照らし出すのは、認識の多様性ではなく、むしろ同じ概念であるがゆえに見落とされがちだった、ある一つの語の中に含まれている複数の現実、現実の多様性の問題である [Viveiros de Castro 2009: 39-42]。

多文化主義の機制では、フィールドにおいて発

見される概念は、人類学者の有する概念へと吸収され、そこに差異は生じなくなる。一方で、ヴィヴェイロス・デ・カストロは、多文化主義の機制の下では等価となる語・概念は、実のところ、その内部で別の現実を同時に表現しうることを強調しているのだ。たとえ一見したところ同じ語であったとしても、それは異なる現実を指示しうる。すなわち、一つの同じ語（文化）が、異なる現実（自然）を指示しうるのだ。すると、「翻訳」という方法は、一つの語・概念が、人類学者が「翻訳」以前に捉えていたのとは異なる別の現実を指示しうることを暴き出し、一つの語の中に潜在していたはずの、それまで隠れていた多様な現実を照らし出す。その一つの語が別の現実も指示していることが明らかとなったとき、結果、人類学者がその概念によって思考していた現実が、別のかたちにもなりうる。「翻訳」による新しい概念の生産は、人類学者の生きる世界、あるいは「我々の世界を多様化する（multiply）」のである [Viveiros de Castro 2015: 27]<sup>8</sup>。

ここまでの議論をまとめよう。フィールドにて発見される理論の中にある概念によって、人類学者の有する既存の概念を「裏切り」、新しいものへと「変容」させ、新しい概念を生産すること。その新しい概念によって、旧来の概念の指示するものとは異なる現実を照らし出し、人類学者が属する世界を多様化すること。これが、概念を「翻訳」する方法であると言える。

## 2-2 スポーツ人類学における有効性

では、この「翻訳」という方法はスポーツ人類学の中でいかなる有効性を持つのか。スポーツ人類学が一つの学的領域として成立して以来、方法的な問題の議論が豊富に積み重ねられてきたとは言いがたい。数少ない議論の中で寒川恒夫は「スポーツ文化複合」概念を提示したが、これはある特定のスポーツ文化を社会・技術・精神的側面の

複合体として捉え、これらが絡まり合う相互作用を捉えるものである [寒川 1994]。しかし、本稿はトレーニングを一個の文化的現象として分析するわけではないため、視座を異にしている。また宇佐美隆憲は、スポーツ文化を翻訳し民族誌として記述することの可能性を論じたが、ここでいう翻訳とは「データを如何に読み解いていくのか」 [宇佐美 1999: 72] という点に限定されている。さらに、ここで宇佐美のいう翻訳は、青木保の議論への言及があることから<sup>9</sup>、本稿が先に言及した多文化主義的翻訳に近いと言える [宇佐美 1999: 84, n.11; cf. 青木 1978]。

これらを背景にしたとき、ヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」という方法は二点において有効性を持つと考えられる。

第一に、それはデータの読解・分析の手法としてだけでなく、その「翻訳」により生産されたもの（ここでは新奇な概念）が「翻訳」者の属する学的領域に与える影響をも考慮している。「翻訳」は「裏切り」であり人類学者の知を変容させる効果を有するのだった。よって、データの分析に焦点を充てた宇佐美の議論を、その分析がいかなる効果をなすのかという点から、補完する役割を果たすと言える。

第二の点は、スポーツ人類学と他のスポーツ諸科学との関係に関わる。トレーニングの人類学は、トレーニングの理論を対象とする以上、スポーツ人類学も含めたスポーツ諸科学、特にトレーニングやプレーを対象とする学知と一定の関係を結ぶことになる。ところでスポーツ人類学は K. ブランチャードと A. チェスカが示唆したようにそれらの学知と関連してきた<sup>10</sup>。すると、「翻訳」という方法をもってトレーニングの人類学に取り組むとき、ヴィヴェイロス・デ・カストロにおいてフィールドの他者に対して人類学が占める位置は、スポーツ人類学のみならず、スポーツ諸科学にまで拡張することになる。つまり、ヴィヴェイ

ロス・デ・カストロにおけるフィールドの他者／人類学者という構図は、トレーニングの人類学においては、フィールドの他者／スポーツ人類学者（+他領域のスポーツ研究者）という構図に置換される。「翻訳」は人類学者の知を変容させるのだから、スポーツ人類学が他のスポーツ諸科学と連関している限り、「翻訳」によるトレーニングの人類学は、スポーツ人類学だけでなく他のスポーツ諸科学を一たとえ部分的にであれ一変容させる。いかなるトレーニングが行われるかという現実を概念が律しているならば、それを「翻訳」し、変容させ、新しい概念を生産したとき、トレーニングの現実自体が、別様のものへと変容され、新しいトレーニング実践やトレーニング法といった現実が生じる可能性があるからだ。すると、ヴィヴェイロス・デ・カストロのいう「我々の世界」が「多様化する」事態の一つの具体として、トレーニングの現実が「多様化する」ことが位置付けられる。

このようにトレーニングの人類学という文脈においては、スポーツ諸科学にもたらしうるもの（「我々の世界を多様化する」こと）という点から、すなわち相対化の効果の側面から有効性を秘めていると言える。トレーニングの人類学は、スポーツ人類学の内部から、スポーツ諸科学の内部において、それを一部分的であっても一それらを変容させる可能性を開くのである。

以下、この方法のもと具体的な事例を考察しよう。それは、戦術的ピリオダイゼーションというサッカーのトレーニング理論と、その「疲労」概念である。

### 3. 戦術的ピリオダイゼーションとは何か

#### 3-1 背景的情報

まず、戦術的ピリオダイゼーションの背景的情

報を概観する。これはポルトガル共和国ポルト市、ポルト大学スポーツ学部（Faculdade de Desporto da Universidade do Porto, 以下FADEUPと略記）教授（当時）のヴィトル・フラデー（Vitor Frade, 1944-）によって1960年代以降に考案された<sup>11</sup>。フラデーは学部卒業後、ポルト市と周囲の衛星都市を含む地域にて、プロのサッカーの指導者としてキャリアを開始した。しかし1974年、ポルト大学スポーツ学部の前身であるポルト大学身体教育高等研究所（Instituto Superior da Educação Física da Universidade do Porto）に着任した。改めて学術的な環境に身を置いたフラデーは自らのトレーニング理論を練り上げ始め、多くの学生をスポーツ方法学の観点から定年退職まで指導した。それに並行し、欧州チャンピオンズリーグを2度制覇したポルトガル屈指の名門FCポルト（FC Porto）でもプロのコーチとして勤務しつつ練り上げられたのが、このPTである。

ただ、フラデー自身はこれまでわずか2本しか論文を書いておらず[Frade 1985, 1990]、PTの理論化は概して彼の大学での指導学生により担われてきた。フラデーの最初の教え子は、現在FADEUPで教員を務めつつ、長らくFCポルトのU-17<sup>12</sup>チームの監督も務め2017年現在はポルトガルU-17代表監督であるJ. G. オリヴェイラである[Oliveira, J. G. 1991]。オリヴェイラ以後、特に2005年から2009年ほどの時期は、フラデーがFCポルトのトップチームに勤務していた際の同僚であるJ. モウリーニョが、フラデーの教え子R. ファリーアとともにPTを用いて[Faria 1999]、FCポルトやイングランドのチェルシーFCなど、欧州のビッグクラブでタイトルを多く挙げていた。その流れの中、サッカージャーナリズム界で、モウリーニョのトレーニング方法論としてPTへの注目が強まり、それに呼応して学術的環境でも、以下のような現在重要視される文献が書かれた。その嚆矢が、FADEUPの卒業生が中心となって

編んだ著作である [Oliveira, B. et al. 2006]。彼らはモウリーニョの語録を整理しつつ、PT の理論構成を秩序付けた。この書物をうけ、より形式的に整理したのが、スペインのバレンシア大学在学中に FADEUP に留学しフラデーから学問的指導を受けた、X. タマリッの 2 冊の本である [Tamari 2009, 2013]。とりわけタマリッの最初の著作は、PT が用いる様々な概念を整理しつつ、トレーニングの形式的な原理を明快に整理した点で、PT の教科書のような役割を果たし、筆者がフィールドワークをつうじ知り得た限り、PT の著作のなかで最も広く読まれている。また彼の 2 冊目の著作は、1 冊目より細かな概念規定にまで手を広げ詳述したものである。他の著作の中で比較的良好に読まれているものとして、FADEUP 卒業生でオリヴェイラの研究指導を受けた、2017 年現在ポルトガル女子代表のアシスタントコーチを務める M. シウヴァの著作 [Silva 2008] が挙げられる<sup>13</sup>。

## 3-2 フィールドについて

### 3-2-1 調査の経緯と方法

筆者は、PT に関する文献的な検討と並行し、2013 年 9 月から 2014 年 7 月まで、FADEUP の大学院博士課程に籍を置き、PT を採用しているクラブのコーチのもとで、PT の研究およびコーチ研修というかたちでフィールドワークを行った。

表 1：“F” の育成年代チームの練習日程

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
17:30-18:00	U-15 U-13		U-13	U-13	
18:00-18:30					
18:30-19:00					
19:00-19:30	U-15 B・C	U-15 A・B	U-17 B および U-15 A	U-15 B・C	U-15 A・C
19:30-20:00					
20:00-20:30					
20:30-21:00	U-19	U-17 A・B	U-17 A	U-19	U-17 A・B
21:00-21:30			および U-19		
21:30-22:00					

(一部省略。なお、セルジオ担当は斜字、調査対象となったチームは網掛けにした)

そのクラブは、ポルト市内西部地域にある“F”というクラブである<sup>14</sup>。そのコーチは、フラデーの FADEUP 在職時の最後期の教え子、セルジオ・フェレイラ (Sérgio Ferreira) という人物である<sup>15</sup>。

調査時セルジオはこのクラブにて U-13 や U-17 などのチームの監督をしていた。他の年代のチームよりも「U-17 のほうが勉強になると思う」と筆者はセルジオに薦められ、U-17 チームにて、主に試合とトレーニングの映像分析のアシスタントとして調査を進めた。具体的には、毎回の練習の前にセルジオと、もう一人のアシスタントであるアルヴァロ・コスタ (Álvaro Costa) とともにトレーニングの準備をしつつ、セルジオから各トレーニングメニュー<sup>16</sup>の狙いや、それと PT の理論との関連について説明された。シーズン中は毎週末に公式戦が行われるため、試合後の最初の練習であれば、試合に関する意見を交換しながらメニューの確認をする。トレーニングが開始するとグラウンド横の観客スタンドから、その様子を観察しつつ映像を録画し、フィールドノートを付ける。時折グラウンド内に降り出したが、映像担当であるためグラウンドを一望する位置にいることが多かった。トレーニングが終わると、セルジオらと片付けをしながら、再び意見交換をし、帰宅する。表 1 にあるように、セルジオは“F”で多くのチー



ムを受け持ち、多忙に過ごしていた。そのため、練習が終わると急いで帰宅することが多く、筆者との意見交換も手早く要点のみに絞ることが多かった。一方、練習が終わった後、最寄りのバス停まで筆者をアルヴァロが車で送ってくれていたの、彼と密な意見交換ができることが多かった。週末に行われる試合日もトレーニング日と同様、準備時に意見交換、スタンドからの録画、観察、ノート、終了後に意見交換という手順で調査を進めた。

### 3-2-2 調査地について：リーグとクラブの概況

クラブ“F”は、経営規模的にも、クラブの成績面でも、ポルト市において特別目立った存在とは言い難い。“F”は1934年に設立され、比較的長い歴史を持つクラブで、ポルトガル代表の主将にまで上り詰めた選手が幼少期にプレーしていたことでも知られている。しかしポルト市には先述のFCポルトや、ポルトガル国内リーグの優勝経験のあるボアヴィスタFC (Boavista FC) などが軒を連ねており、“F”は必ずしも強豪クラブとは見なされていなかった。実際、当時このトップチームは、ポルト市を中心とする地域のアマチュアリーグ (5部に相当) に所属していた。ポルトガルサッカーの制度において、年齢制限のない世代に加え、育成年代と総称される年齢制限の付いたチームのうちU-19、U-17、U-15は全国リーグが設置されているが、このU-17チームを含めこのクラブの育成年代のチームはいずれも全国リーグではなくポルト地域の1部リーグに所属していた。

とはいえ、“F”のU-17チームは、筆者の調査前の2012-2013年シーズンに件のリーグで3位、本調査の翌シーズンは2位となり全国リーグへの昇格を賭けたプレーオフに進出した。これらの年に限らず、育成年代は時折全国リーグにまで進出することもあったという。さらに、上記のFCポルトやボアヴィスタFCなどを筆頭に、ポルト市

に限らずポルトガルサッカー自体が少ないパスの本数で速攻を仕掛けるチームが多数あるなか、このクラブは、伝統的に細かいパスで攻撃を組み立てるチームスタイルを全ての世代で一貫して採用しており、この地域では一定の評価を与えられ独自の位置にあるクラブである<sup>17</sup>。セルジオの言葉を借りれば、筆者の調査したU-17において、攻撃面では「細かいパスをつないで攻める (ataque com passes curtos)」, 守備面では「素早くスペースを狭めてボールを奪い返す (recuperar a bola fechando o espaço com rapidez)」ことをプレースタイル上の原理としていた。

そうしたプレースタイルを実現するべく、U-17のトレーニングは、表1にあるように週3日、2013年9月から2014年1月までは火曜・水曜・金曜、2014年1月以降は火曜・木曜・金曜に行われた。筆者が調査した限り、ポルト市と周辺地域において育成年代はトレーニングを週3日行うことが一般的だった。

この毎週3日のトレーニングを行ったあと、シーズンが開幕する9月から翌年4月のシーズン終了までは毎週末に公式戦が行われる。公式戦は、欧州の多くの国と同様、特定の期間に集中して行われるのではなく、シーズン中の毎週末に行われる<sup>18</sup>。筆者の調査時期は、9月の第4週目の週末に全国統一地方選挙が組まれたため試合が行われなかったが、それ以外の9月から4月の毎週末には、16チーム、ホーム&アウェー2回戦総当たりの計30試合の公式戦が組まれていた。

## 4. 戦術的ピリオダイゼーションにおける疲労概念の「翻訳」をめざして

### 4-1 疲労概念と諸関連概念

#### 4-1-1 疲労概念：心身両面

ここからPTの重要な諸概念について考察しよう。筆者が調査を始めてすぐ、また調査期間を通

じてセルジオは繰り返す、「選手たちが試合において、最もフレッシュな状態で (mais fresco) プレーできるようにしなければならない」、「選手は肉体だけでなく、頭も同様に疲労する。後者も考慮すべきだ」と筆者に述べていた。

セルジオの以上の言葉は、PTの理論に対して全く忠実なものである。タマリツによれば、選手は、身体面と同様に思考・精神面でも疲労しているとされる [Tamarit 2009: 79-80]。選手は、身体的な運動に起因するかたちで、とりわけ筋肉や心肺機能の面で疲労する。その一方で、様々に目紛しく状況が変化していくなかで、どのようなプレーが必要なのか、常に思考するよう晒されている。思考・精神面の疲労は、このようなプレーに関わる連続的な意思決定に起因するとされる [相原 2013a: 65-66; Tamarit 2009: 85-86]。こうした心身両面に渡る疲労は、PTにおいて「戦術的疲労 (fadiga táctica)」と呼ばれ、特に思考・精神面での疲労という観点をより強調するために、ときに「情動的疲労 (desgaste / cansaço emocional)」とも呼ばれる [Tamarit 2009: 80, 2013: 126, n.5]。筋肉などの身体面の疲労だけでなく、思考・精神面での疲労、すなわち頭が疲れている状態も考慮し、心身の両面における疲労がともに最低限の状態になるようにつまり「最もフレッシュな状態で」試合を迎えるよう図る。PTのトレーニングでは、これが最も実践的に重要な点であるとされる<sup>19</sup>。フラデ自身は、「疲労がなければトレーニングはなく、消耗がなければトレーニングはない。消耗がなければ改善もないし、消耗があるからこそ、回復して良い状態になる絶対的な必要性が生じる」と述べ、トレーニングにとり疲労という条件が本質的であると主張する [Frade in Tamarit 2013: 117]。

#### 4-1-2 戦術概念：包括性

とはいえ、なぜ心身両面に跨ることが「戦術的」と形容されるのか。PTにおいて「戦術

という概念は、やや特殊な意味を与えられている。PTは、プレーが展開される環境を自然現象に類比しつつ「複雑なシステム (sistema(s) complexo(s))」と呼ぶ。そこでは、選手たちの様々なプレーや、ピッチの状況、天候、観客の存在などの無数の因子が複雑に絡み合っており、よって時間を経ながら絶え間なく状況が変化する。こうした時空間は、それ自体で一つの全体—ただし、機能的に諸要素から構成されるのではなく、むしろある未知の要素が突然予想に反して作用を始めたり、反対に唐突に作用を止めたりする、先の予測が困難である流動的な全体—をなしており、決して断片化や細分化を施すことができない。つまり、複雑なシステムは部分へと細切れにできず、それと同様にその中で展開されるプレーも分割できないと考えられている。PTにおける定義上プレーは、身体的なもの (o físico, 筋力や心肺機能など)、心理的のもの (o psicológico, 勇気や決断力など)、技術的のもの (o técnico, ボールテクニックなど) を各々単独ではなく、常に包括的に捉えなくてはならない。これら3つの様相を全て包括したときの様相が、「戦術的」と呼ばれる<sup>20</sup>。よって、「戦術的」と形容されるのは、選手のプレーの包括的な様相が含意されているからだ [e.g. Silva 2008: 24; Tamarit 2009: 47]<sup>21</sup>。

#### 4-1-3 戦術的強度：調節される複雑性

PTは、このプレー環境の複雑性、プレーの包括性 (戦術性)、疲労という3点を中心にトレーニングを組み立てるよう説く。先述のように、リーグ戦期間中は毎週末に公式戦が組まれており、選手たちは直前の試合の疲労を残しているし、そうでなくとも、トレーニングに起因する疲労を残している。一方で、選手たちのプレーおよびプレー環境は常に、分割が許容されない包括的な全体である。よってトレーニングも同様に、未知の要素が新たに介入し、予想を超えた出来事が起こる潜在的な可能性に満ちた複雑なシステムであら

ねばならない—トレーニングは試合に似ていなければならないのだ [Tamarit 2009: 67-68]。すると、トレーニング、その各メニューは、選手の疲労度に応じて、複雑なシステムの複雑性の程度を調節する必要が生じる。不確定な要素が増え、作用を始めてしまう新しい要素が増える環境では、選手はその分だけ、思考・精神面でも身体面でも疲労するからだ。このように、疲労度に応じて調節された複雑性の程度のことをPTは「戦術的強度 (intensidade táctica)」と呼ぶ [Silva 2008: 94-96; Tamarit 2009: 92-100, 2013: 44-48, 89-90]。「戦術的疲労」と同様、これが「戦術的」と形容されるのは、プレーが展開される環境は常に分割不可能な包括的なものだからである。

先に触れたように、選手の特に思考面での疲労の原因は、プレーが展開される環境のなかで、連続的に意思決定を強いられることである。よって戦術的強度を下げるとは、身体的な側面において、運動量を下げることにとどまらない。それと同時に、選手たちが思考する量を下げること含まれる。すなわち、あるプレーに関与する人数の多さ(多ければ、判断する際に考慮すべき要素が増える)、プレー空間の一人当たりの広さ(一人当たりのスペースが広くなればその分だけプレーは容易になる)、プレー時間の長さ(時間が長ければ、思考は持続性を要求される)が、この複雑性＝戦術的強度を決定する要素となる。これらの要素が高まれば、その分だけ戦術的強度は高まり、その分だけ選手たちは思考・精神面でも身体面でも疲労しやすくなる。すると、最も複雑性が高く、最も戦術的強度が高く、最も疲労しやすいのは公式戦となる。翻って、これらの要素を低めれば、選手たちは思考・精神面でも身体面でも疲労しにくくなり、疲労度が高いときであっても許容可能となる。

以上の諸概念、特に疲労概念を中心的な焦点とし、“F”のU-17チームのある一週間のトレーニ

ングを一例に、どのようにトレーニングが展開されるかを見よう。

#### 4-2 一週間のトレーニングの構成原理としての疲労

以下に見るのは、2014年2月18日(火)、20日(木)、21日(金)のトレーニングである。この週の前には16日(日)に公式戦が行われ、週末の23日(日)に公式戦を控えていた。ポルトの地域U-17リーグの場合、原則日曜に試合が組まれている。ただ、時折グランドの日程管理上の都合で土曜に行われることも珍しくなかった。この週を取り上げるのは、前後の試合が原則通りに日曜に開催され、疲労を基準にトレーニングが組み立てられる上で、標準的な週だと言えるからだ。

##### 4-2-1 火曜

この火曜は、試合後の最初の練習日である。先述のように、試合は複雑性＝戦術的強度が最も高い機会であり、最も疲労を惹起しやすい。月曜の休養日を挟み1日経ったが、選手たちは試合の疲労から十分に回復しているとはされない。一方で、火曜は、次の試合からは最も遠い練習日でもある。さらに、週に3日トレーニングを組むとき、この翌日の水曜が休養日に当たるため、戦術的強度は下げるものの、一方で下げすぎてもいけないし、上げすぎてもいけない日とされる。

なおPTにおいて、公式戦の終わった当日、試合後のミーティングはほぼ行われぬ。というのも、上記のとおり公式戦は戦術的強度が最も高いのだから、その試合の直後は1週間の中で選手が最も疲労しているからだ。そのときに身体を動かすことはなくとも選手をさらに思考させてしまうようなミーティングを開催することは、忌避される。また、試合翌日も、選手たちはトレーニングを行うのに十分回復しているとは見なされないため、完全な休養日としなくてはならないとされる [Tamarit 2013: 88-89]。休養後の火曜は、表2のように構成されていた<sup>22</sup>。



写真1: ロンドの様子



写真2: ポゼッションの様子

表2: 2014年2月18日(火)のメニュー一覧

	メニュー名称	関与人数	持続時間	スペース
1	ロンド	4 + 1	12分×1本	約3m×3m
2	ポゼッション	(3 + 1) × 2	3分×4本	約15m×7m
3	シチュエーションゲーム	9対7	5分×4本	約40m×30m
4	ゲーム	6対6	上限4分	約40m×25m

最初に行われたのは、「ロンド (meinho)」<sup>23</sup> と呼ばれるメニューである (写真1)。おそらくサッカーにおいて、世界的に見ても最も流通しているメニューの一つと予想されるもので、通例3～4人の選手が極めて小さな四角形のスペースの四辺の上に位置取ってボールを回し、その四角形の内部で1～2人の選手が位置取ってボールを奪おうと試みるものだ (写真1)。ボールを奪う側は味方が少ないため、戦術的強度は上がりそうに見えるが、スペースが小さく運動量が比較的少なく済む上に、相手のパスコースが限定されているため、戦術的強度はかなり低くなる。例えば相手が4人であれば、パスコースは最大3つしかないし、スペースも小さいため、相手は足元のパスを繋ぐ以外の選択肢がない。運動量と判断の要素が少ないのだ。この日は表2にあるように12分連続で行われたが、たとえ持続時間が長くなっても戦術的強度はさほど上昇しない。また、時折セルジオ自身もボールを奪う側として加わり、選手がリラックスしてプレーするようレクリエーション (brincadeira) 目的で実施されることもあった。

次に行われたポゼッション (posse da bola) と呼ばれるメニューは、ボールを繋ぐことを主目的として行われる。この日は、縦方向つまり相手ゴール側にボールを繋ぐことを主眼として、縦方向に長いコートが設計された (写真2)。

エンドラインに見立てられた線上に1名ずつ立ち、コート内は3人对3人の状況下で、相手の守備を回避してパスを繋ぎ、最終的に線上に立つ味方選手 (写真2, 四角囲み) にパスを渡すことが試みられる。ロンドと比べると、運動量が増え、敵の人数も増えている。先述のように、火曜はいまだ試合による疲労が抜け切っていないため、持続時間は各セッションを3分とし、合間におよそ1分の休憩が入っていた。さらに、各グループは線上に立つ選手を含め4人で構成されるが、このうち1人が順に線上に立つため、各選手とも運動量や思考量が相対的に減る役割を、1回3分は担えることになり、実質的に6分の休憩時間を挟み9分間プレーすることになる。こう考えれば、戦術的強度が上がりすぎないと言えるだろう。

その後、ハーフコートで、プレー上のテーマを

設定するゲーム形式のメニューが行われた。これは“F”では「シチュエーションゲーム (situação de jogo)」と呼ばれていた。縦方向はハーフコートのサイズだが、横方向はコーンでラインを設定し、実際のグラウンドの横幅よりも狭い (写真3)。持続時間も1本5分と長くなり、関与人数も (GKを含めて) 9人对7人と増える。この日は、縦に速くパスを繋いでゴールに迫るといった具体的なテーマが設定され、選手たちはそれを企図したプレーが要求され思考すべき量が増えるため、戦術的強度は上昇すると言える。

このメニューからは選手たちの個別的な疲労度への配慮も見ることができる。まず、一見すると9人に対して7人が相手をするというのは、7人チームにとっては戦術的強度が高いように思われる。しかし、この7人は日曜に試合に出場していないか、短時間出場した選手のみであった。つまり彼らは相対的に疲労が少なく、高い戦術的強度のメニューも許容できた。翻って、試合に長時間出場した8人の選手は人数的により余裕があり、同じメニューでも戦術的強度が低くなり、その疲労の濃さに対しても許容可能な強度だった。

さらに、このうちの数人の選手はプレーエリアを制限されていた。その選手はFW<sup>24</sup>の選手であるが (写真3の丸囲み)、この前の週末の試合、“F”からは格下とされる相手と対戦したため、本チームが攻撃する時間が長く、FWの選手らはプレー

に濃密に関与する時間帯が長かった。個別的な疲労度を考慮した上で、このメニューでは彼らのプレーエリアを狭め、その役割を縮小させる設計がなされていた。

また、このメニューにおいて、コーンで設けられたサイドラインの外側には、数人の選手を配置している (例えば写真3の右下、四角囲みの選手)。こうした選手はPTに限らずフリーマン (posto) と呼ばれ、主にコート内の外側でボールを受けてパスを出す役割のみを果たす。よって、プレーのために思考すべき量も運動量も減り、戦術的強度が激減する。フリーマンに配置する機会を多くすれば、個別的な疲労度に対応できるのだ。加えて、フリーマンは原則としてボール保持側をコートの外で受けるため、ボールを保持して攻撃しているグループ側にとっては、味方がその分だけ増える。よって、ボール保持側の戦術的強度の抑制にも寄与する。

最後に行われたのは、ゲーム形式のメニューである (写真4)。選手たちを6人ずつ3つのグループに分けて、順にゲーム (jogo) を行う。うち1グループはフリーマン役 (写真4、丸囲み) を担う。ゲーム形式では、シチュエーションゲームの個別的プレーエリアの制限が解かれるので、より流動的にプレーが展開され、ピッチ内で起こる出来事が様々ありうる。例えば、プレーエリアを制限されていたFWが自陣ゴール前に戻って守備



写真3: シチュエーションゲームの様子



写真4: ゲーム形式の様子

をすることもありうる。ただ、そうすると戦術的強度が上がりすぎるため、横幅を短くしてスペースを小さくし、関与人数を減らす。さらに、メニューの持続時間も最大4分と短くされていた。なお、ここで「最大」4分なのは、どちらかのチームが2点を決めた段階で一方のチームが交代するため、それより短い時間で1つのゲームが終わることもありうるからだ。さらに、仮に4分間ゲームが行われたとしても、1チームはコート外でフリーマンの任にあたるため、その間は非常に低い戦術的強度に抑えられていた。

#### 4-2-2 木曜：持続時間とスペースの増大

木曜は、前回の練習日から1日休養を挟み、前の試合から3日経ち、次の試合まで2日ある日である。しばしばPTでは指導者の経験則として、選手たちが試合の疲労から次の試合を行うのに十分に回復するには、途中の練習日で過度な戦術的強度を課さない限り、あいだに3日かかると言われている [Oliveira, B. et al. 2006: 112]。その3日経過した日が、この木曜である。つまり、選手たちは十分に回復していると見なされる。それはこの日のメニュー（表3）にも反映されている。

この日の最初のメニューは、火曜と同じく Rond であった。火曜と同じ人数の設定だが、この日はコーンを置いてスペースが設定されず、事実上グラウンド全てが可能なスペースだった。持続時間は火曜の12分から7分へと減ったものの、同じメニューでも可能な運動量が増える分、火曜に比して戦術的強度は上昇する。シチュエーションに関しても、火曜と同様の人数、同様のスペース、同様のプレー上のテーマが設定されていたが、1回の持続時間を増やしていることが分かる。

そして、木曜で最も特徴的なメニューが、紅白戦である。以下に見る金曜も含め、練習日のうちフルコートでメニューに取り組むのは、この木曜の紅白戦のみである。さらにプレー人数も11人同士となり、フリーマンも設けられず、持続時間も1試合の半分に相当する40分間である。前の試合から3日挟んだ木曜になると、試合を行うのに十分なまでに回復している一だからこそ実際に試合を行う。加えて、この紅白戦の相手は普段からともに練習するU-17のチームメイトではなく、U-19チームであった。年上であることに加え、3.2.2で述べたようにこのU-19チームのメンバーの大半は、この前年にU-17リーグで3位という好成績を収めたチームである。非常に強い相手に、試合に最も近い状況でプレーすることを要求されたのだ。

以上のように、疲労からの回復に応じるかたちで、特に持続時間とスペースを増大させることで、戦術的強度を増大させている。

#### 4-2-3 金曜：持続時間の制限

最後に、週の最後の練習日、金曜である。試合の前々日で、かつこの日の前日が最も戦術的強度の高い練習日であるため、選手たちは試合による疲労からは回復しているものの、木曜の疲労が残っている。よって練習日の中では、最も戦術的強度を下げるのが企図される。表4にあるように、火曜および金曜と比べ特に関与人数や持続時間を短くすることで、それを低下させる措置が採られている。

Rond は火曜と同様だが、より重要なのはそれ以降のメニューである。ポゼッションは、2人ずつのペアに分けた上で、コート内は2人対2人と

表3: 2014年2月20日(木)のメニュー一覧

	メニュー名称	関与人数	持続時間	スペース
1	Rond	4 + 1	7分 × 1本	ハーフコート
2	シチュエーションゲーム	8対7	8分 + 6分	ハーフコート
3	ゲーム	11対11	40分 × 1本	ハーフコート

表 4: 2014 年 2 月 21 日 (金) のメニュー一覧

	メニュー名称	関与人数	持続時間	スペース
1	ロンド	4 + 1	13分×1本	約3m×3m
2	ボゼッション	2対+4	1分×8本	約15m×12m
3	シチュエーションゲーム	2対3+5体2	最大2分×10本	ハーフコート
4	セットプレー付きゲーム	6対6	上限5分	ハーフコート

いうかたちで関与人数を火曜から減らし、さらにフリーマンを4人付ける。フリーマンを含めボール保持側は実質的に6人となり、戦術的強度が下げられる。一方でボールを奪う側は2人で6人を相手しなくてはならないが、持続時間が1分と大変短く、さらにこの1分間が終わると、ボールを奪う側だったペアは、フリーマン役になる。メニューを展開する中で、あるグループは、1分ごとにボールを奪う側→フリーマン→フリーマン→ボール保持側、というサイクルを2回繰り返す。つまり、戦術的強度が高い時間が1分間しかなく、それ以外の3分間は戦術的強度が低いのである。

高い戦術的強度が要求される時間を短い時間に限定するのは、次のシチュエーションゲームにも看取できる。このメニューは、1) ロンド、2) シチュエーションゲームの組み合わせである。まず、センターライン近くに約3m四方の小さなゾーンを設け、そのなかで3人の選手がボールを保持し、2人の選手(MFの選手)がそれを奪いにかかる(写真5)。2人の選手がボールを奪ったり、あるいはそのゾーンの外側にボールがこぼれたりしたら、そのゾーン外で待機している3人のFW

と一緒に、MFとFWの計5人でゴールに速攻を仕掛ける、という設定である(写真6、なおロンドが終了して以降、ロンドのボール保持側だった3人の選手はプレーに関与しない)。上記の計5人の選手に対し、やはりロンドの間待機していたGKとDF2人(写真6のビブス着用の選手)が守る。つまり、1) 3人对2人のロンドと、2) 5人对2人(+GK)のシチュエーションゲームの組み合わせである。

まず、最初のロンドの段階でボールを奪いにかかる2人のMFの選手はボールを奪って守備から攻撃に切り替えるため、相対的に戦術的強度が増大する。しかし全体の持続時間が最大2分として設けられ、時間内にシュートまで至らない場合はそこで強制的にセッションが終了される。またこの2人のペアは1つのセッションが終わると、別のMFのペアと各セッション交代するため、2分間のプレー後に休憩できることになる。

2人のDFも見よう。彼らは5人に対して2人で-GKを含めると3人で-5人も選手から守る必要がある。5人の相手はパスコースも多い上に、速攻がテーマである以上速いスピードで攻め



写真 5: 中央でのロンドの様子



写真 6: 5対2のシチュエーションゲーム

てくるため戦術的強度は非常に高いが、持続時間が最大2分であり、MFと同様にセッションごとに別のDFのペアと交代するため、戦術的強度の過度な増大が抑制される。なお、一方、ロンドでボールを保持する3人の選手と、ロンドが終わるまで待機してから攻撃に参加する3人の選手たちは、相対的に低い戦術的強度であるため、数本ごとに一人ずつ交代されていた。

最後に、火曜と同様の人数と同様のスペースでゲームが行われた。一見すると持続時間が火曜の4分よりも長い、火曜の2点で交代という条件から1点という条件に変更され、より頻繁にグループが入れ替わり、戦術的強度を低下させる。このように主として持続時間を短くすることで、惹起される疲労の抑制が図られている。

## 5. 疲労概念の「翻訳」

以上の事例を踏まえつつ、疲労概念の「翻訳」を試みよう。先述のように、PTは疲労を「戦術的疲労」とも呼称し、疲労が身体的側面だけでなく精神的側面にも関与する包括的なものであると概念化していた。事例で見たように、試合翌日の月曜は、選手たちの疲労度が高すぎるために休養日であった。それは選手たちがプレーできないほどに疲労しているからと言える。また、例えば火曜日では、日曜に試合に出場した選手たちはプレーできる程度がより低い—身体を動かすのも、頭を働かせるのも、できる範囲が低いのである。そして、やがてプレーを一定程度できるほどに疲労度が弱まるにつれ、より戦術的強度の高いメニューを実行することが可能となる。PTにおいて、疲労とは、選手たちの心身がプレーできない程度のこと、つまり能力の低下として概念化されていると言える。

ところで、PTの戦術概念などはスピノザ哲学に由来することが示唆されている[相原 2013a]。

ここで着目すべきは、スピノザ哲学の心身並行論である。精神の能力が低下するとき、それに並行して身体能力も低下するし、同様に精神と身体能力は相関して増大する。精神と身体能力は並行して増減するとされる。PTの戦術概念は、この心身並行論に基礎付けられている。この論に従いつつ、PTの疲労が戦術的疲労とも呼称されることも考慮すれば、疲労も同様に心身並行的だと考えられる—すなわち精神面の疲労と身体面の疲労が相関的に増減する、ということだ。スピノザ哲学との関連は一定の留保が必要だろうが、事実セルジオは、選手たちが疲労によってプレーの質が落ちている事態は、身体的に疲労していると同時に、精神的にも疲労していることなのだ<sup>25</sup>。疲労が戦術的であるというのは、身体的疲労と精神的疲労が並行していることを含意するのだ。

加えて、PTの疲労概念は、あくまでもプレーが展開される環境の戦術的強度（以降、より簡便にこれを「環境の強度」と呼んでおこう）と相関するものとして概念化されている。戦術的強度は、メニューなどが試合に似ている程度、その複雑なシステムとしての程度のことで、これが高ければより疲労を惹起しやすく（その最も高いものが試合そのものであった）、低ければその分だけ疲労を引き起こしにくいとされていた（例えばロンドは戦術的強度が低く抑えられる）。すなわち、疲労の程度は、環境の強度と相関していると言える。

以上を合わせれば、PTの疲労概念は次のように「翻訳」できるだろう。プレーが展開される環境の強度と相関し、心身両面が並行して、能力が低下すること、である<sup>26</sup>。

## 6. 「翻訳」によるトレーニングの人類学は何をなするか

本稿の前半で検討したヴィヴェイロス・デ・カストロの議論に沿って、この疲労概念の「翻訳」



が何を行ってきたのか、また「翻訳」がトレーニングの人類学において何をなしているのかを考察しよう。

### 6-1 概念の生産と複数の現実

第一に、疲労という概念を「翻訳」という方法は、その概念の中に潜在的に畳み込まれていた、「環境の強度との相関した能力の低下」「疲労の心身並行性」という要素を析出させた。PTにおいて疲労という現象は、単に筋肉と精神の両面に関わるだけでなく、その両面が並行的であること、環境の強度と相関しつつ選手たちの心身両面で能力が一時的に逓減することでもあった。

確かに、能力の低下といった要素は、例えば生理学的な疲労概念にも含意されているかもしれない[e.g. 矢部 2006: 746]。能力の低下という要素それ自体は、あるいはそれ単独では確かに自明かもしれない。しかし重要なのは、明示的とは言い難かったこれらの要素が、「翻訳」という方法によって、より明示化されて析出されたという点、また環境の強度などの別の要素と連関したかたちで疲労が概念化された点にある。PTの疲労概念はもはや疲労という語によって説明されるのではなく、「心身並行性」「能力」「環境の強度」などの別の語を産出しながら、それらによって説明される、別の概念へと変容されたのだ。

これは以下のように別言できる。この別の概念が産出された母胎である、一見したところ我々になじみ深いこの概念には、身体的・筋肉的な疲労という現実的な現象と、心身の両面にまたがる疲労という現実的な現象が、既に同時に畳み込まれていた、と。PTの疲労概念は、心身の並行的な疲労を表現し、環境の強度とも相関することを指示し、能力の一時的な逓減をも表現する。これは、二つの疲労のありかたという相異なる複数の現実を、さらには能力上の逓減という現実などを、実は既に同時に表現していた。いわばこの疲労概念

は、一つの語の中に異なる複数の現実を織り込んでいたのだ。

PTの疲労概念には、心身両面の疲労と、選手たちの能力の逓減という現実がそもそも含み込まれていた。しかし、我々はこれまでそれらの現実を「疲労」として概念化していなかった。我々が持っている他の疲労概念からすれば、心身並行性や環境の強度との相関性は、隠れていた現実だろう。PTのこの概念を「翻訳」という方法によりそれらの現実は、実際に我々が思考可能なものとして現実化される。PTの疲労概念は、先に挙げた2つの異なる現実を同時に表現していたつまり、1つの文化（概念）が、複数の自然（現実）を表現していたのだ。「翻訳」により、当の概念が潜在的に含み込み隠れていた別の概念と現実が析出されたのだ。

### 6-2 さらなる新しい現実の産出の可能性

すると概念の「翻訳」は、ただ単に概念の別の用法を可能にして、我々の認識の多様化を—多文化主義的な効果を—もたらすだけではないだろう。概念の中に隠れていた、潜在的に別の異なる現実を現実化するだけでなく、さらにそれとは別の現実を我々自身の手で創り出すことにもつながるのではないか。

2.2で述べたように、スポーツ人類学は他のスポーツ諸科学と密接に関わる学問である。すると、スポーツ人類学が「翻訳」により新たな概念を生産すると、それは他のスポーツ諸科学に対し、これまでとは異なるトレーニングのかたちを可能にする基盤を与えることになる。これはブランチャードとチェスカの議論に沿うものだろう。彼らは「人類学的見通しによって可能となった、一般的には社会的なあるいは特殊には兵站的なプログラムに対する解答と解答の可能性は、スポーツと一層明確に関係する仕事にたずさわる人たち（たとえば、コーチ、体育教師、校内活動管理者、レク

リエーション指導者)にとって、おおいに関心がありかつ価値があるものとなるはずである」[ブランチャード & チェスカ 1988: 3]と述べ、スポーツ人類学の研究が、やがてその領域を越えてより広いスポーツ実践へと影響を与える可能性を指摘する。これと同様に、またヴィヴェイロス・デ・カストロが「我々の世界を多様化する」と言うように、トレーニングの人類学は、概念の「翻訳」により、トレーニング実践を別のものへと変容させ、その現実を多様化させる可能性を開くのではないか。疲労に関して言えば、心身並行的な疲労や環境との相関性を運動生理学的・心理学的に研究する道筋や、それにもとづくトレーニング方法の開発などがありうるかもしれない。これらは、スポーツ人類学がスポーツ諸科学や、スポーツ指導者に与える影響としてブランチャードとチェスカが挙げたのと同様な具体例に相当する[ブランチャード & チェスカ 1988: 3, 27]。確かに、彼らの以上の主張は、スポーツ人類学という学問を自立させつつ、隣接する諸学問に対してその価値を明確化する意図があったかもしれない。しかし、むしろここで重要なのは、「翻訳」によるトレーニングの人類学が、スポーツ人類学内において、また他のスポーツ諸科学との関連において果たしている役割の一つを、彼らの主張をなぞりつつも明確化できたことにある。その役割こそ「我々の世界を多様化する」ことだったのだ。

このようにトレーニングの人類学は、スポーツ諸科学が律するトレーニング実践を相対化するだけでなく、それを別のものへと変容させる基点を提供しうる。確かに、トレーニングの人類学も、トレーニングに関わる他の領域と同様、トレーニングの内容を考察の対象とする。しかし、前者は何よりも、概念の「翻訳」によって生じるズレそれ自体に着眼し、そして現在のトレーニングの現実が別のものへと変容する可能性自体に着目するのだ。とはいえそれは何も、スポーツ諸科学にお

ける疲労概念が消滅し別の疲労概念に取って代わるとか、新しいトレーニング理論が開発されて既存のものが解体される事態を引き起こすことが企図されているのではない。むしろ、ある一つの同じ語・概念が指示する現実が多様化され、我々のスポーツ諸科学の世界が多様なものへと拡張する可能性自体を開こうとするのだ。そうして新しく産出された概念を我々が手にし、それを我々自身のトレーニング実践に応用したとき、我々自身が今度は、例えば特定のスポーツのトレーニング現場で、また別の概念を生産し、つまり再度の「翻訳」によって、さらに別の疲労概念と、それが表現する別の現実を創り出す可能性があるだろう<sup>27</sup>。

以上のように、「翻訳」によりトレーニングの人類学を拓き探索することは、トレーニングの新しい現実が創り出される可能性を開くことでもある。フィールドで発見される概念の「翻訳」は、広くスポーツ科学全体においてトレーニングを変容させ、多様化させる基盤と可能性を提供しうるのだ。

## 7. まとめと展望

本稿は、トレーニングの人類学という新たな領域を拓くにあたり、近代スポーツが理論的に強固に構成されているという特徴的な事実に着目し、フィールドで発見される概念をいかに学問的な言葉へと変換するのかという方法論的問題を提起した。そこでヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」に着目し、PTの疲労概念を、その応用実践の事例を見ながら「翻訳」した。疲労概念は、心身並行的で、環境の強度と相関する能力の低下として「翻訳」され、以上のような2つの新しい概念を産出した。概念の「翻訳」は、新しい概念を産出するとともに、一つの語・概念(文化)の中に潜在的に含まれ隠れていた現実(自然)を捉えることを可能にし、また、スポーツ人類学者を含

めたスポーツ研究者自身が別様のトレーニング実践という現実を新たに生み出す可能性を開く。トレーニングの人類学は、我々自身のトレーニングの現実を、多様化させる可能性を与えるのだ。

本稿は、その議論の対象をサッカーという近代スポーツに限定してきた。では、以上の方法は、いわゆる伝統スポーツ、民族スポーツに対して有効だろうか。おそらく有効と考えられる。それは、ヴィヴェイロス・デ・カストロがアマゾン先住民社会をもとに「翻訳」していたからだ。また、他に問われるべき論点として、スポーツ実践のもう一つの特徴的な事実と考えられる、理論が文書化されるという事実、そしてその文書化された理論と、実際の応用実践との関係が挙げられるだろう。

とはいえ本稿の目的は、フィールドで見つかる概念の「翻訳」という方法によってトレーニングの人類学を切り拓き、それがいかなる知見を与えるのか、何をなす可能性に開かれているかを検討することにあつた。もし人類学という営為が人類学者自身の世界の変容をもたらさうのなら、本稿それ自体によって、スポーツ人類学者を含めたスポーツ諸科学の研究者ら自身が関与する現実を変容させ、新しい現実を生産させる可能性が一微々たるものであっても一あるかもしれない。少なくともここでは、新しい現実が、本稿に続く論文というかたちをもって生産されることを、強く俟ちたい。

### 【謝辞】

本稿は、2016年に東京大学大学院に提出された博士論文の第1章と第5章を中心に大幅に修正したものである。博士論文の主査であった木村秀雄先生と副査の先生方に、また修正に際し、細部に渡る貴重なコメントを頂いた匿名の査読者の方々に御礼申し上げたい。

### (Endnotes)

- 1 ここでいう「理論」は、概念の集合体あるいはその総体的体系という意味で用いる。
- 2 例えば Bourdieu [1977, 1980], Lave and Wenger [1991], 田辺 [2003] など [cf. 相原 2013b; 福島 2010]。
- 3 ここでの「近代スポーツ」は宇佐美 [2004: 7-8] に準じ、歴史的時間軸上、近代以降に成立したスポーツを指す。また同様にさしあたり本稿が「トレーニング」と呼ぶとき、近代スポーツにおいて実践される練習を指示する総称とする。
- 4 なお、このような方向性は、他の数少ないスポーツのトレーニングに関する人類学的研究である Brownell [2006] も共有している。
- 5 この解釈は、決して登壇者たちの意図を見抜く試みではなく、筆者が彼らの議論の中にスポーツ人類学の新しい問題が生まれていたのではないかと考えたとき、生じたものである。その意味でこの解釈は、たとえ登壇者たちの考えと異なっていたとしても、調査者が必ずしもフィールドの人々の考え方に対して完璧な忠実さを見せるわけではないなかでそこに学問的な問題を見出すことと、相同的だろう。
- 6 ここでは先述のように、理論に律せられて展開される実践を対象を限定する。確かに、本稿ののちに扱う事例においても、PTの理論から説明しえない実践が存在したことは十分にありうるし、その理論外の実践の意義を本稿は軽視しない。しかし、概念の「翻訳」という問題に関し、本稿の目的は理論外の実践を対象とせずとも達成できると考えられる。
- 7 以下、特に指示のない限り、傍点強調は原著者によるイタリック強調である。本稿で引用する外国語文献の日本語訳は、原則筆者による私訳である。
- 8 なお翻訳概念は、ポストコロニアリズムの中で民族誌家による選元的な表象の政治性の問題とも関わって論じられてきた [e.g. 本橋 2005; ヤング 2005]。ただ、これは植民地主義の政治社会的問題であり、本稿の論点とは異なる。
- 9 宇佐美は、この翻訳概念の基礎を人類学者の青木保のいう「文化の翻訳」に求める [宇佐美 1999: 84, n.11]。青木は、「文化の翻訳」という行為によって、フィールドの人々と人類学者のあいだに相互主観性を成立させ、両者が共有する場—これは多様な文化に普遍的に共有される「純粋文化」ともされる—を開くことを目的とすると論じている [青木 1978]。青木はいわば、文化間の差異が解消される地平を探求している

- とも言えるだろう。もしその地平が単一の現実(自然)であれば、そのまま多文化主義の構造に一致する。
- 10 この点に関連して、ヴィヴェイロス・デ・カストロは、「裏切り」の効果の及ぶ範囲を人類学者の世界の内部にしか認めていないように見える。確かに、『食人の形而上学』では、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの共著『アンチ・オイディプス』『千のプラトール』への人類学—とくに、贈与論、親族論、(親族論を含めた)構造主義など—の影響を指摘している [e.g. Viveiros de Castro 2009: 75]。この影響を、人類学による「翻訳」が人類学を越えて与えた変容の効果の一例と理解可能かもしれない。そう解釈できるかは曖昧ではあるが、もしそう解釈することができ、「翻訳」の効果が人類学を越えて他の分野にまで及ぶのだとしよう。すると、例えば構造主義的亲族論を取り上げたとき、彼は、哲学に加え(構造主義的)言語学への「翻訳」の影響も視野に入れるべきだったし、少なくともその効果の可能性に言及すべきだったのではないか。その意味で、本稿での「翻訳」概念は、ヴィヴェイロス・デ・カストロ自身のそれを、その内的な概念規定に基づきながらも、批判的に拡張している。スポーツ人類学においては、「翻訳」の効果の範囲を、彼のように狭くとるのではなく、6.2でより詳細に言及するブランチャードとチェスカの記述にもとづき、より広く他のスポーツ諸科学まで広げるべきと考えられるからだ。
- 11 PTの理論としての起源について、相原 [2013a] は1970年代と述べる。しかし、本稿でのちに言及するタマリッによるフラデーへのインタビューなどによれば、PTはフラデーが学生時代から学んでいた知見をもとに構想していた理論が原型である [Tamarit 2013: 15-25]。よってその起源は、フラデーの学生時代、1960年代だとするのが適切だろう。
- 12 “U-17”などは、チームに所属する選手がリーグ戦・大会終了時に迎える上限の満年齢を示す略号である。略号ではあるが、サッカーでは公式戦の名称などにも用いられるため、本稿でも以下この略号を用いることとする。
- 13 教え子の著作は、ほとんど必ず出版前に元指導教員であるフラデーに一読されコメントが与えられる。例えば、2011年5月に筆者がタマリッにスペイン国バレンシア市にて出会った際、彼は2冊目の本 [Tamarit 2013] を書き上げたばかりで、その1週間後にポルト市に赴きフラデーにチェックされるのだと言っていた。そしてそのチェックの様子の写真は、本に掲載されてすらいる [Tamarit 2013: 10]。よって以下の考察では、フラデー自身の論考が僅少なため教え子の著作からも引用するが、PTを一つの理論的なまとまりとし、論者ごとに異なるPT内部の差異は論点としない。
- 14 監督とコーチについては許可を得られたため実名で記述するが、一部の選手からは正式な許可を得られなかったため、調査されたクラブ名についてはイニシャル表記とする。
- 15 クラブ“F”の年齢制限のある育成年代のチームは全て、セルジオのようなフラデーの教え子たちが監督を務めPTを採用していたが、そのトップチームは別のトレーニング理論を採用していた。クラブ全体として一貫してPTを採用していたのは、筆者に知り得た限り、フラデーがコーチとして勤務していたFCポルトのみである。他のクラブにはPTを採用する指導者が点在しているものの、クラブ全体で採用しているわけではない。
- 16 本稿では便宜上、「メニュー」は個別的な練習形式、「セッション」はメニューの中で繰り返し行われる単位を指示する。
- 17 “F”が強豪クラブとして定着しない理由は、本クラブで活躍を見せた選手が、よりヒエラルキー上位のクラブへと引き抜かれるからである。例えば、調査前年の3位のチームからは実に4人が別の近隣の強豪クラブへと移籍したと聞いた。
- 18 欧州サッカーの制度的事情は、現地で勤めた経験のある日本のサッカー指導者がしばしば伝えてくれる。例えば村松 [2009]、村松・小澤 [2013] など参照。
- 19 実際、筆者が2011年5月にタマリッと会ったときも、PTにおいて最も重要で、かつ最も看過されがちなのはこの疲労の戦術的側面だ、と彼は繰り返し強調していた。
- 20 よって、「戦術」と呼ぶからといって特定のプレーの形式のみを指示するわけではないことに留意したい。この「戦術」概念も「翻訳」の対象となりうるが、フィールドで発見される概念の「翻訳」という観点からは、疲労概念だけで十分だと言えるため、本稿は「戦術」概念を直接の「翻訳」の対象としない。
- 21 イギリスのサッカー方法学者E. ワーシントン(Whittington)は、サッカーを様々な要素が介入する「複雑な全体 (complex whole)」として定義し、チームとして適切な相互作用を働かせつつプレーすることを「チーム技術 (team skill)」と呼んだ [Whittington 1974]。彼の議論はPTと、環境の複雑性(「複雑なシステム」)とプレーの包括的

- なあり方（「戦術」）に強く配慮する点を共有する。しかし彼は個人技術の習熟に特化した練習メニューを設計しており [Worthington 1974: 163-175], プレーの包括的なあり方を重視する態度と一貫していない。
- 22 なお、スペースに関しては、セルジオが自らの歩幅で距離を測りながら目算で設定している。この表についても、筆者による目算である。
- 23 以下、トレーニングメニューの訳語は、日本にて一般的に流通し、それに対応していると考えられる名称がある場合、それを用いる。
- 24 本稿では以下、ポジションについて、FW（フォワード）、MF（ミッドフィールダー）、DF（ディフェンダー）、GK（ゴールキーパー）という記号を用いる。
- 25 確かに、選手たちに個別に詳細な聞き取り調査を行えば、この心身並行性が彼らに本当に経験されているか、PTの理論とプレーの実践などがズレているかなどを検討できたかもしれない。しかし選手たちはトレーニングや試合が終わると、保護者とすぐに帰宅することが多く、また彼らは日中高校に通っていたこともあり十分な調査が行えなかった。以上については、改めて調査を実施した上で別稿に譲りたい。
- 26 補足しておけば、疲労概念の「翻訳」の結果生産されたこれらの別の語は、PTの文献の中に登場しない。しかし、例えば選手たちの疲労度が「環境の強度」と比例することは事例として挙げたトレーニング実践から読み取ることは十分に可能だろう。その意味でこの「翻訳」は、PTに対して内在的に導き出された妥当な理解であると考えられる。
- 27 仮にこのような研究が実際に開始され、その結果、例えばPTにおける疲労の心身並行性が否定されれば、それはPTを今度は逆方向から相対化するだろう。その意味で「翻訳」は、差異を次々に創り出すサイクルの可能性を開いている。そのサイクルは、多様な世界をさらに多様化させる、「小さな他性を氾濫させる」[Viveiros de Castro 2009: 9] のだ。

#### 参考文献一覧

- 相原健志 2013a 「自然、コナトウス、戦術」『表象文化論研究』9: 50-75.
- 2013b 「身体的実践とその学習の実験性に関する理論的考察と展望」『スポーツ人類学研究』15: 133-141.
- 青木保 1978 『文化の翻訳』東京大学出版会
- ブランチャード, K. & A. チェスカ 1988 『スポーツ人類学入門』(大林太良監訳・寒川恒夫訳) 大修館書店

- Bourdieu, Pierre. 1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1980 *Les Sens pratiques*. Paris: Les Éditions du Minuit.
- Brownell, Susan. 2006 “Sport ethnography.” In: Dick Hobbs and Richard Wright (eds.) *The Sage Handbook of Fieldwork*. London: Sage, pp.243-254.
- Faria, Rui. 1999 “*Periodização Tática.*” *Um Imperativo conceitual metodológico do rendimento superior em futebol*. Porto: Faculdade de Ciências Desportivas e Educação Física da Universidade do Porto. Dissertação de Licenciatura.
- Frade, Vítor. 1985 *Alta competição no futebol –que exigências do tipo metodológico?* Porto: Instituto Superior da Educação Física da Universidade do Porto.
- 1990 *A Interação, invariante estrutural do rendimento do futebol, como objeto de conhecimento científico*. Porto: Faculdade de Ciências Desportivas e Educação Física da Universidade do Porto. Projecto para a prestação de provas de doutoramento.
- 福島真人 2010 『学習の生態学』東京大学出版会
- Ingold, Tim. 1993 “The act of translation in a continuous world.” In: Gisli Pálsson (ed.) 1993 *Beyond Boundaries*. Oxford: Berg, pp. 210-230.
- 2000 *The Perception of the Environment*. Oxon: Routledge.
- Lave, Jean & Etienne Wenger. 1991 *Situated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 本橋哲也 2005 『ポストコロナリズム』岩波書店
- 村松尚登 2009 『テクニクはあるが、「サッカー」が下手な日本人』ランダムハウス講談社
- 村松尚登, 小澤一郎 2013 『日本はバルサを超えられるか』河出書房新社
- Oliveira, Bruno, Ricardo Barreto, Nuno Resende, e Nuno Amieiro. 2006 *Mourinho: Porquê tantas vitórias*. Lisboa: Gradivá.
- Oliveira, José Guilherme. 1991 *Especificidade, o “pós-futebol do pré-futebol.”* Porto: Faculdade de Ciências Desportivas e Educação Física da Universidade do Porto. Dissertação de Licenciatura.
- Sands, Robert. 1995 *Instant Acceleration, Living in the Fast Lane*. Lanham: University Press of America.
- Silva, Marisa. 2008 *O desenvolvimento do <<jogar>>, segundo à Periodização Tática*. Pontevedra: MC Sports.
- 寒川恒夫 1994 「スポーツ文化複合」寒川恒夫編 『スポーツ文化論』杏林書院, 18-24 頁
- Tamarit, Xavier. 2009 *¿Qué es la periodización táctica?*. Pontevedra: MC Sports.

- 2013 *Periodización Táctica vs Periodización Táctica*.  
Madrid: MBF.
- 田辺繁治 2003 『「生き方」の人類学』講談社現代新書
- 宇佐美隆憲 1999 「スポーツ文化の翻訳と記述」『東洋大学  
紀要. 教養課程篇. 保健体育』第9号, 71-85 頁
- 宇佐美隆憲編著 2004 『スポーツ人類学』明和出版
- Viveiros de Castro, Eduardo. 1998 “Cosmological deixis and  
Amerindian perspectivism.” *Journal of the Royal Anthropo-  
logical Institute* (N.S.), 4: 469-488.
- 2009 *Métaphysiques cannibales*. Paris: Presses Universi-  
taires de France.
- 2015 *The Relative Native*. Chicago: Hau.
- Worthington, Eric. 1974 *Teaching Soccer Skill*. Edinburgh:  
Lepus.
- 矢部京之助 2006 「疲労」日本体育学会『スポーツ科学事典』  
平凡社, 746-748 頁
- ヤング, ロバート・J・C 2005 『ポストコロニアリズム』(本  
橋哲也訳) 岩波書店